

日本旧石器学会

ニュースレター 第17号

NEWS LETTER No.17

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

会 長 声 明

東日本大震災ならびにそれに伴って引き起こされた福島第一原発事故で被災された皆様に、衷心からお見舞い申し上げます。会員の皆様におかれても、居住環境の被害、また勤務の大学、博物館、教育委員会などの諸施設で多大な被害にあわれたかたも少なからずいらっしゃると思います。長期戦になりますが、状況の一刻も早い回復を祈念する次第であります。

2011年6月末にはアジア旧石器協会（APA）第4回大会と国立科学博物館のシンポジウムを合同で開催する予定で、今日まで準備を進めてまいりました。本会から選出した大会実行委員を中心に万全の態勢で迎えるべく準備の最中、3月11日に発生した地震・津波と原発事故の影響が次第に多方面に影響し、予定どおりの開催か延期かの判断を早急に下す必要が生じました。

事前に内外から可能なかぎりの情報を収集して準備の後、4月10日にAPAと国立科学博物館（現代人的行動シンポ）との合同実行委員会を開催し、慎重に議論の結果、会期を6月から11月へ延期する決定をいたしました。

詳細は以下を御覧頂きますが、引き続き会員のみなさまの御理解と積極的な参加を期待いたします。

小野 昭

The DUAL SYMPOSIA：シンポジウム

「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」 及び第4回アジア旧石器協会（APA）日本大会延期のお知らせ

2011年6月25日～30日に開催を予定していた the Dual Symposia：シンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」及び第4回アジア旧石器協会（APA）日本大会の延期が、4月10日の実行委員会によって決定されましたのでお知らせいたします。

<延期の理由>

今回の東日本大震災とそれに伴う福島第1原子力発電所の事故以来、実行委員会では開催、延期の両者の可能性を視野にその動向をうかがってきました。

発電所の状況やそれに伴う周辺地域の放射能の影響については改善しつつあるものの、その鎮静化までにはまだ長い時間がかかりそうなことは、皆様御存知の点かと思えます。実

際には東京での放射能の影響は問題ありませんが、原発の状況に関しては海外では日本以上に関心が高く、日本への渡航禁止や自粛を受けている参加予定の研究者が少なからずいることは、延期を決定する主要な理由の一つです。

また、原発事故に伴う電力の供給不足による計画停電の影響は、大きな電力消費の見込まれる夏季の6月末よりも11月の方がリスクが少なく、会場となる国立科学博物館、巡検先である沼津市文化財センターも延期を支持する判断をされたことがもう一つの大きな理由です。

以上の点を含めその他諸々の条件を開催と延期の両者の立場で熟考した結果、今回の延期の結論に至りました。御理解の上、更なる御協力をいただければ幸いです。

新日程

2011 年 11 月 26 日～12 月 1 日

- 11 月 26 日 (土)：登録、一般講演、ウェルカムパーティー
- 11 月 27 日 (日)：A P A シンポジウム、ポスターセッション、A P A 役員会
- 11 月 28 日 (月)：遺跡巡検・検討会 (沼津市文化財センター)
- 11 月 29 日 (火)：現代人的行動シンポジウム 1 日目
- 11 月 30 日 (水)：現代人的行動シンポジウム 2 日目
- 12 月 1 日 (木)：現代人的行動シンポジウム 3 日目、フェアウェルパーティー

会場 (変更なし)

国立科学博物館 講堂

(〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20)

<http://www.kahaku.go.jp/>

参加登録・発表要旨締切

2011 年 9 月 15 日

登録・問い合わせ先

シンポジウム事務局 M & J インターナショナル

新川順子 気付

〒241-0817 神奈川県横浜市旭区今宿 1-35-17

FAX：045-361-9681

Mail: junko_nikkawa@99.catv-yokohama.ne.jp

<参加登録及び発表要旨の提出について>

参加登録、及び発表要旨を提出して下さった方々に厚く御礼を申し上げます。提出されました登録用紙、及び発表要旨はもちろん新日程のシンポジウムでも有効ですが、日程の変更に伴うキャンセルや登録内容の変更、発表要旨の差し替え、その他御質問がある場合には事務局までお気軽にお問い合わせください。

また、未登録の方の上記新日程での参加も歓迎いたします。希望される場合には、9 月 15 日までに事務局宛に登録用紙を e-mail にて送付してください。

2011 年度日本旧石器学会総会のお知らせ

2011 年 5 月

日本旧石器学会

会員各位

会長 小野 昭

会則第 5 条により、2011 年度日本旧石器学会総会を次のとおり開催いたします。

本総会は、震災の影響による第 4 回アジア旧石器協会日本大会および現代人的行動シンポジウムの開催延期に伴い、例年の講演会・研究発表・シンポジウム等を伴わず単独で開催されます。会員の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。次第です。

なお、総会の開催には「委任状を含め、全会員の 5 分の 1 以上の出席」を必要とします。御欠席の場合には委任状を御提出頂きますよう、何卒お願い申し上げます。

日時

2011 年 6 月 25 日 (土) 15:00 から

(受付で会誌「旧石器研究」7 号の配付を行います)

場所

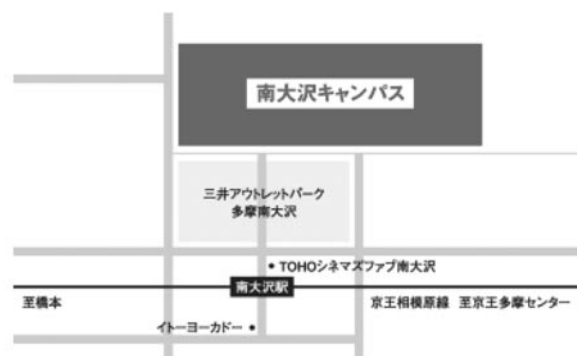
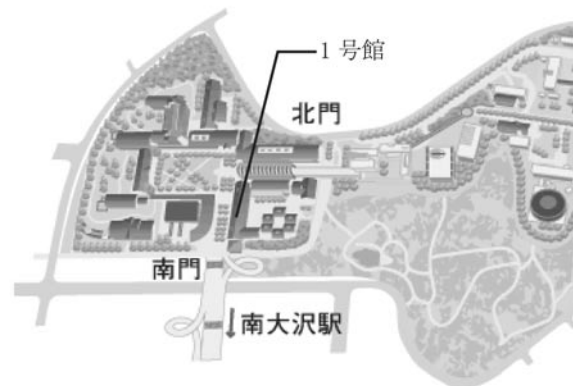
首都大学東京 1 号館 110 号教室

(〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1)

http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/map.html

報告・審議事項

- ・2010 年度活動報告
- ・2011 年度活動計画 (案)
- ・研究グループ支援制度について
- ・その他



2011 年度日本旧石器学会総会会場 (首都大学東京) 略図

日本における更新世人骨研究の現状と課題 ー沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査からー

山崎真治・片桐千亜紀・藤田祐樹・土肥直美・米田穰

1 はじめに

2010年2月、新石垣空港建設予定地内に所在する白保竿根田原洞穴出土の人骨から、約2万年前の更新世に遡る年代値が得られたことがAnthropological Science誌に報告された(Nakagawa et al. 2010)。このことは、後期更新世の石垣島に人類が到達していたことを示す重要な科学的証拠となるものであった。その後、沖縄県教育委員会では、沖縄県立埋蔵文化財センターを事業主体とし、石垣市教育委員会の支援を受けて2010年8月から11月まで、白保竿根田原洞穴遺跡の緊急発掘調査を実施した。その概要は既に報告したが(山崎ほか2010、片桐ほか2011)、重ねて調査成果の概要を紹介し、この遺跡並びに出土人骨の意義と今後の調査研究上の展望・課題点について述べたい。

2 白保竿根田原洞穴遺跡の調査概要

白保竿根田原洞穴遺跡は、沖縄県石垣市白保竿根田原から盛山東牛種子にまたがる長大な石灰岩鍾乳洞の一面に形成された遺跡である。調査に至るまでの複雑な経緯については、既に詳しく報告した(山崎ほか2010)。発掘調査の結果、遺跡は更新世のある時期に、長大な洞穴の一部が崩壊して形成された光の差し込む開口部及び陥没ドリーネ付近に位置し、最終氷期最盛期から近現代に至るまで断続的に人類によって利用された複合遺跡であることが判明した。遺跡の層序は以下のとおりである。

0層：現代の造成土

I層：グスク時代包含層

II層：砂礫層(先史時代の津波堆積物?)

IIIA層：無土器文化期および下田原文化期包含層

IIIB層：イノシシ骨主体層(完新世初頭)

IIIC層：人骨主体層(完新世初頭～最終氷期最盛期)

IV層：人骨主体層(最終氷期最盛期)

従来、内容の明確な沖縄諸島最古の人類文化は、縄文時代早・前期(約6000年前)に相当する爪形文文化であった。爪形文文化と、港川人をはじめとする沖縄の更新世人骨との間には約1万年の空白(ミッシング・リンク)があり、その解釈に関しては議論が続いている。また、八重山諸島最古の人類文化は下田原文化であり、年代的には縄文時代後期(約4000年前)に相当する。これまで八重山諸島では、更新世に遡る人骨や遺跡が確認されていなかったため、八重山諸島に人類が到達・適したのとは下田原文化期と考えられていた。下田原文化やそれに続く無土器文化は、その内容から沖縄諸島の先史文化とは無関係で、南方系の文化と考えられている。白保竿根田原洞穴遺跡のIIIB層～IV層からは、八重山諸島はもとより、沖縄諸島においてもこれまで未確認であった、完新世初頭から最終氷期最盛期にかけての段階的な人類活動の痕跡が重層的に確認されており、沖縄の人類史研究に新たな検討材料を提供することと



写真1 白保竿根田原洞穴遺跡遠景(洞穴天井部分は除去されている)

なった。以下、各層ごとの調査状況を紹介する。

IIIB 層からは多量の獣骨（イノシシ）と少量の石材、人骨が検出されており、イノシシ骨の放射性炭素年代測定によって完新世初頭の年代値を得ている。イノシシ骨には破碎されたものも多く、全身の各部位が面的な広がりをもって検出された。伴出した石材は、非在地系（自然の営力によって遺跡に流入する可能性が低い石材）の火成岩類（閃緑岩、凝灰岩）、チャート等と、在地系の変成岩類、石英に大別される。非在地系石材は人為的な搬入の可能性が推定され、チャートや石英の中には打製石器の可能性が推定されるものも含まれる。さらに断片的な人骨（遊離歯など）も確認された。一方、土器はまったく確認されておらず、IIIB 層は先土器時代に属する可能性がある。食糧残滓と考えられるイノシシ骨の豊富な出土と伴出した石材からは、生活空間や作業空間としての洞穴利用が想定されるが、炉址等は未確認であり、洞穴利用の実態については今後の検討課題である。

IIIC 層からは人骨が主体的に出土している。帰属時期については現在年代測定を実施中であるが、IIIB 層と IV 層の間に位置することから、完新世初頭から最終氷期最盛期の間に位置づけられる。人骨のほとんどは解剖学的位置関係を保っていないが、面的なまとまりをもって検出された。また、一骨体分の保存良好な頭骨がつぶれた状態で検出されたり、左右大腿骨が並んだ状態で検出される状況も確認できた。一方、明確な人工遺物は確認されておらず、獣骨も少ない。IIIB 層段階とは包含層の状況や内容に明確な差異が認められる。このような差異は、当該期の洞穴利用形態を復元する上で示唆的である。南西諸島では、縄文時代後期から洞穴や岩陰を利用した崖葬墓（遺体を洞穴や岩陰に安置し、骨化後に集骨する集団墓地）が頻繁に営まれていたことがわかっている。本遺跡でも、IIIA 層相当層からは八重山諸島初となる下

田原文化期の崖葬墓が確認されており、IIIC 層の状況もそのような墓（崖葬墓）としての洞穴利用を示唆するものと推定している。

IV 層は遺跡発見の端緒となった約 2 万年前の更新世人骨が発見された層準に相当し、最終氷期最盛期の堆積層と考えられる。IIIC 層同様、解剖学的位置を保たない人骨がまとまって出土しており、鳥骨、ネズミ骨等の小型脊椎動物骨や少量の炭化物も検出されている。調査面積は 6 m²程度と限定されており、大部分は保存対象である。このため、得られた情報は断片的であるが、IIIC 層同様人工遺物は未確認である。

3 白保竿根田原洞穴遺跡と出土人骨の意義

人骨の取り扱いを決定する上で、人骨の産状は重要である。特に、人骨出土地が墓（または葬送の場）であるかどうかという点は、土地に付帯する歴史としての埋蔵文化財を考える上では、重要なポイントになる。しかし、実際の遺跡から検出される墓には、縄文時代以降においてすら、さまざまなバリエーションがあり、まして国内で数例しか検出例のない更新世の墓を一般的な形で論じることは不可能であろう。比較的調査がよくなされているネアンデルタール人骨の場合でも、いわゆる遺構としての掘り込みが確認できた例はないといわれるが、人骨の検出状況から墓（burial）を営んだことが広く主張されている。さらに遡って原人の時代には、意図的な墓が存在したかどうか不明である。以上のように、墓の認定をめぐるのは、概念上の問題や解釈の入り込む余地があるが、ある場所から人骨が検出されること自体が、その土地での人類活動を物語る証拠となる。人骨が包含される地点の発掘調査を実施することで初めて、墓の有無や葬墓制に関する議論が可能となる場合もある。文化遺物を伴わない人類化石出土地は、いわ



写真2 H6 区 IIIC 層人骨（頭骨・大腿骨）検出状況

ゆる「流れ込み」として扱われてきた傾向があるが、保護の対象として慎重かつ丁寧な取扱いが必要である。

従来知られている沖縄の更新世人骨及び日本本土唯一の確実な更新世人骨である浜北人は、すべて洞穴や裂罅内に埋没した堆積物中から回収されており、生活場所や文化に関する情報を欠いている。白保竿根田原でも、人骨が集中的に出土したⅢC層以下から文化遺物は未検出であり、更新世人骨も遺跡発見当初は「流れ込み」と考えられていた。しかし、一部に平面的な分布を示すものがあり、全てが洞穴外から流れ込んだものとは考えられない。

本遺跡では考古学的発掘調査だけでなく科学的調査が体系的に実施され、大きな成果を上げることができた。発掘調査の結果明らかとなったⅢIB層とⅢIC層・Ⅳ層における洞穴の利用形態の差異は、更新世末～完新世初頭における人類の洞穴利用形態と葬墓制を議論する上で、稀有な考古学的・人類学的データとなることが期待される。

また、白保竿根田原洞穴遺跡出土の更新世人骨は、多くの点で重要な意義をもっているが、第1に強調しなければならないのは、人骨そのものから更新世の年代値が得られた点である。従来、沖縄の港川人をはじめとする更新世人骨については、その年代を疑問視する向きもあったが、今回の白保竿根田原洞穴遺跡において、沖縄にも更新世人類が分布していたことが科学的に証明された点は大きい。東アジアの更新世人骨のうち、人骨そのものから放射性炭素年代値が得られているものは、中国の田園洞（40,000BP）、ベトナムの Hang Cho（10,000BP）、日本本土の浜北（14,000BP）そして白保竿根田原洞穴など数例に過ぎない。さらに、人骨からコラーゲンが抽出できたことは、安定同位体や古DNA分析の可能性に大きな展望を開くものであり、今後の分析の進展によっては、東アジアにおける新人の拡散プロセスについて新たな知見が得られる可能性がある。

さらに付け加えると、更新世末段階の石垣島は、大陸から孤立した島であったと考えられており、このような小規模な島嶼に、更新世人類が到達していたことは、驚異的である。世界の更新世遺跡について詳しく調べたわけではないが、沖縄の島々はパプアニューギニアのマヌス島などとともに、更新世に人類が到達したことが確実な、世界的に見ても稀有な例ということになるだろう。現生人類の適応力と拡散力を如実に示す事例として、白保竿根田原洞穴遺跡における更新世人骨の発見は、世界的に見ても重要な意義を有している。

有機質遺物が遺存することの稀な日本において、更新世人骨が学術研究の対象として重要であることは言うまでもな

い。各地で更新世人類の発見をめざした発掘調査が行われていることも、その現れであろう。文化財行政上も、古人骨は埋蔵文化財として扱うことが妥当であり、しかも重要視すべきことが示されている（昭和28年厚生省医務局長回答、平成9年埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する研究委員会報告）。

世界的に見れば、「スタークフォンテン、スワートクランズ、クロムドライ及び周辺地域の人類化石遺跡群」（南アフリカ）、「オモ川下流域」（エチオピア）、「アワッシュ川下流域」（同）、「サンギラン初期人類遺跡」（インドネシア）、「周口店の北京原人遺跡」（中国）などが、人類化石の出土そのものが文化を物語る重要な証拠として重視され、世界文化遺産として保護されている。日本における更新世人骨とその出土地の保護は、日本の旧石器研究の未来にも関わる重要な課題と我々は考えている。その保護のあり方について、活発な議論を望みたい。

本原稿は当初、更新世人骨とその出土地の保護に関する問題提起をも含むものであったが、編集委員の指摘を受けて削除した。

引用文献

山崎真治・片桐千亜紀・米田穰 2010 「白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査と沖縄における更新世人類研究の現段階」『考古学研究』57-3 1-5頁

片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹 2011 「更新世人骨の発見」『季刊考古学』114 89-90頁

R. Nakagawa et al. (2010) Pleistocene human remains from Shiraho-Saonetabaru Cave on Ishigaki Island, Okinawa, Japan, and their radiocarbon dating, Anthropological Science, Vol. 118(3), 173-183

平成9年6月20日付け日本学術会議（人類学・民族学研究連絡委員会）声明「古人骨研究体制の整備について」

昭和28年6月13日付け文化財保護委員会事務局長から厚生省医務局長あて「古墳等より出土の人骨について（照会）」及び昭和28年6月22日付け厚生省医務局長から文化財保護委員会事務局長あて「古墳等より出土の人骨について（回答）」

平成9年2月 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する研究委員会「出土品の取扱いについて（報告）」
出土品の種類・分類例

人骨番号	部位	性別	年齢	14C年代 (BP)	出土地点
No. 1	頭蓋冠	男性	30代～40代	175 ± 56	人骨のホール
No. 2	右頭頂骨片	男性	20代～30代前半	20,416 ± 113	化石のホール
No. 3	第1腰椎	男性	成人		化石のホール
No. 4	右第2中足骨	不明	成人	18,752 ± 100	化石のホール
No. 5	左頭頂骨片	男性	20代～30代前半	998 ± 61	コウモリのホール
No. 6	左大腿骨上部	不明	成人	2,320 ± 46	礫のホール
No. 7	左頭頂骨片	不明	成人		水流ポイント
No. 8	右腓骨骨体部片	男性	成人	15,751 ± 421	化石のホール
No. 9	前頭骨片	不明	成人		化石のホール

表1 白保竿根田原洞穴遺跡から回収された人骨資料

石器文化研究会設立 25 周年記念第 5 回シンポジウム
「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何か
ー概念と実態を問い直すー」開催報告

2011 年 1 月 22 日（土）・23 日（日）の両日、明治大学駿河台校舎リパティータワー 1083 教室を会場として、石器文化研究会設立 25 周年記念第 5 回シンポジウムが開催された。

石器文化研究会は、1985 年の発足以来、1991 年の第 1 回シンポジウム「AT 降灰以前の石器文化」を皮切りに、関東地方を中心としたナイフ形石器文化の層位的変遷を主題としたシンポジウムを開催し、その成果は関東平野南部を中心とした層位編年の基礎となってきた。しかし研究会のシンポジウムおよび例会において、1990 年代前半までは関東を中心とした各地域の様相の整理・把握と対比に重点が置かれていたが、次第に多様な研究視点の導入による解釈・説明の比重が増してきた。その背景として立川ローム層下部まで及ぶ大深度発掘が常態化し、多層位遺跡の検出例が関東全域に拡大したことがある。編年対比が急速に進んだ一方で、「新規の発見」や時期・段階の細分が一段落し、変化・変遷をどのように理解・説明するのかという課題がより鮮明になってきたのである。

このような研究状況を背景として、石器文化研究会では 2006 年度から「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何か」を共通テーマとした例会を開催し、ナイフ形石器を中心とする石器群とそれにとまなう考古学的事象、地域性や時代性の問い直しを試みてきた。しかし議論を重ねる中で、「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化」という用語そのものが、必然的に議論の枠組みや方向性を決めてしまうという問題が浮き彫りになってきた。そこで、あらためて「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化」の用語・概念そのものを問い直し、あるいは多様な研究視点から見直すということを中心テーマとしたシンポジウムを開催することとしたのである。

シンポジウムのプログラムは以下の通り。

2011 年 1 月 22 日（土）

記念講演「日本列島の旧石器時代研究における石器と文化の区分」安藤政雄（明治大学）

第 1 部 ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何か

基調報告 1 「日本旧石器時代」とナイフ形石器・ナイフ

形石器文化」西井幸雄（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
基調報告 2 「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化を見直す」
野口淳（明治大学校地内遺跡調査団）

第 2 部 枠組みと構造分析の視座と展望ー

基調報告 3 「石器形態研究の原則と後期旧石器時代前半期の石器素材利用形態をめぐる研究」山岡拓也（首都大学東京）／コメント・富樫孝志（静岡県埋蔵文化財調査研究所）

基調報告 4 「石器製作技術・動作連鎖からみたナイフ形石器文化」鈴木美保（明治大学校地内遺跡調査団）／コメント・長井謙治（日本学術振興会特別研究員）

基調報告 5 「石材開発領域からみたナイフ形石器文化」国武貞克（奈良文化財研究所）／コメント・川口武彦（水戸市教育委員会）

基調報告 6 「遺跡形成過程からみたナイフ形石器文化」坂下貴則（明治大学校地内遺跡調査団）／コメント・及川穰（東京国立博物館）

基調報告 7 「ナイフ形石器の出現と成立」仲田大人（青山学院大学）／コメント・島田和高（明治大学博物館）

基調報告 8 「いわゆるナイフ形石器文化「後半」を考える」長沼正樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）／コメント・岩瀬彬（首都大学東京）

1 月 23 日（日）

第 3 部 ナイフ形石器・ナイフ形石器文化を問い直す 1
ー各地の実相からー

基調報告 9 「石器群の広域編年からみた地域社会の形成過程」森先一貴（奈良文化財研究所）

コメント「北海道・東北地方から」吉川耕太郎（秋田県立博物館）／「関東・東海・中部地方南部から」中村雄紀（静岡県埋蔵文化財調査研究所）／「中部地方北部・北陸地方から」加藤学（新潟県埋蔵文化財調査事業団）／「近畿・中四国地方から」光石鳴巳（奈良県立橿原考古学研究所）／「九州地方から」松本茂（宮崎県埋蔵文化財センター）

第 4 部 ナイフ形石器・ナイフ形石器文化を問い直す 2
ー新たな地平を目指してー

（司会）野口淳・富樫孝彦（パネラー）砂田佳弘・諏訪間順・佐藤宏之・伊藤健・西井幸雄

シンポジウムは 2 日間で 100 名の参加者を得て盛会のう



第 5 回シンポジウム記念講演の様子



石器文化研究会設立 25 周年記念第 5 回シンポジウム会場

ちに幕を閉じた。論点は多岐にわたっており、シンポジウムのテーマ、課題について一定の解答が得られると想定していなかった。実際、基調報告とコメント、そしてパネル・ディスカッションを通じて、さらに多くの課題が浮き彫りになったというのが正しいだろう。「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化」という用語についても、現状維持を是とする立場から、大幅な見直し論まで、さまざまな見解が示された。しかし、いずれにしても、これまで所与の前提とされてきた事柄について、それを見直す、考え直す必要があるという認識は共有されたのではないと思う。

なお、パネル・ディスカッションの内容を中心とした記録集および、シンポジウム・テーマにもとづく論文集が、石器文化研究会より刊行される予定となっている。本シンポジウムを糸口として議論が深まることになれば幸甚である。

(野口 淳)

第36回九州旧石器文化研究会熊本大会 「ナイフ形石器群の変遷と地域性～九州 における重層遺跡の検討～」開催報告

2011年3月19日(土)・3月20日(日)の両日、熊本市中央公民館を会場として、第36回九州旧石器文化研究会熊本大会が開催された(共催:熊本旧石器文化研究会、後援:熊本市教育委員会)。

この1週間前に東日本大震災が発生したことを受け、最初に参加者全員で黙祷をおこない、その後に会の開会となった。受付に備えられた義援金箱には多くの義援金が集まり、後日地元マスコミの善意銀行を通して被災地に送金された。

本会のテーマは、「ナイフ形石器群の変遷と地域性～九州における重層遺跡の検討～」である。発会30周年の記念すべき節目であり、発会の契機となった大分県岩戸遺跡をはじめ、九州地方においては近年A T下位の黒色帯(暗色帯)層から上位にかけて重層的に石器群が確認される事例が増加しつつあるため、その内容と課題を整理し、石器群の時間的変遷と地域性を検討することを目的としたものである。また発会当初から九州旧石器文化研究を牽引してこられた萩原博文会長の還暦記念の集会をも兼ねている。

年度末も押し寄せた3月の開催となったが、北は北海

道から南は鹿児島県まで、多数の研究者の参加を得ることができた。加えて一般市民の方々にも参加いただき、2日間で延べ117名の参加があった。

会の内容は、以下の通りである。

2011年3月19日(土)

開会挨拶 萩原博文(九州旧石器文化研究会会長)、木崎康弘(熊本大会実行委員代表)

趣旨説明 村崎孝宏(熊本大会実行委員長)

記念講演「ナイフ形石器群の編年研究に向けて」萩原博文(九州旧石器文化研究会会長)

個別発表1「東九州南半の様相」松本 茂(宮崎県埋蔵文化財センター)

個別発表2「南九州の様相」馬籠亮道(鹿児島県立埋蔵文化財センター)

資料見学会

3月20日(日)

個別発表3「東九州北半の様相」萩 幸二(福岡県教育委員会)

個別発表4「中九州西部の様相」橋口剛士(熊本県御船町教育委員会)

個別発表5「北九州西部の様相」辻田直人(長崎県雲仙市教育委員会)

討論

閉会挨拶 木崎康弘(九州旧石器文化研究会事務局長)

記念講演では、萩原博文氏により、遺跡内の遺構・遺物の分布状況を研究していく上で、民族誌を援用して分析・考察していく方法についてお話しいただいた。講演終了後には、萩原氏の還暦を祝して、記念論文集(『九州旧石器』第14号)の献本、および花束の贈呈がおこなわれた。

続く個別発表は、本会のテーマに合わせて、九州各地域における重層遺跡・石器群について報告がなされた。松本氏は宮崎県五ヶ瀬川流域および宮崎平野、馬籠氏は鹿児島県大隅半島、萩氏は大分県大野川流域、橋口氏は熊本県瀬田池ノ原遺跡、辻田氏は長崎県島原半島を対象とし、基本層序や石器群の様相、層位的変遷について解説がなされ、地域ごとの石器群の内容や課題が明らかにされた。

1日目最後には資料見学の時間が設けられ、九州各地から持ち寄られた石器資料を前に、見学者間で熱気ある議論が展開された。



第36回九州旧石器文化研究会熊本大会 記念講演の様子



第36回九州旧石器文化研究会熊本大会 資料見学会風景

2 日目の討論では、村崎孝宏・越知睦和両氏の進行のもと、九州各地域の重層遺跡・石器群について、主に礫群と石器群との関係、各地域の通時的な共通性・独自性、問題点・課題の明確化に関して議論がなされた。また九州地方以外の様相として、中国・四国地方について藤野次史氏、関東地方について島田和高氏より発言をいただくことができた。

2 日目午後には遺跡見学会が予定されていたが、雨天のため中止となり、急遽、本会実行委員・調査主体者側の要望を受けた火山灰考古学研究所の早田 勉氏により、土層・テフラ分析に関する情報提供・問題提起がおこなわれた。

(岩谷史記)

お し ら せ

日本第四紀学会2011年大会（徳島）

日本第四紀学会 2011 年大会が、下記の日程で実施される予定ですのでお知らせします。

[開催期間]

2011 年 8 月 26 日（金）～ 8 月 28 日（日）

[開催場所]

鳴門教育大学（徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748）

[日程]

8 月 26 日（金）

一般研究発表（口頭およびポスター）評議員会

8 月 27 日（土）

一般研究発表（口頭およびポスター）

総会

懇親会

8 月 28 日（日）

午前：学会賞・学術賞受賞者講演会

午後：公開シンポジウム『環太平洋の環境文明史』

世話人：米延仁志、山田和芳

8 月 29 日（月）

アウトリーチ巡検「百万年前の東四国を探る」（日帰り）

案内者：中尾賢一、西山賢一

[大会実行委員会]

実行委員会委員長 米延仁志

連絡先：実行委員会事務局

〒 772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748

鳴門教育大学科研プロジェクト室

Tel/Fax 088-687-6411

詳細は日本第四紀学会 HP をご覧下さい。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/q/index.html>

第37回九州旧石器文化研究会大分大会

「九州地方における三稜尖頭器の製作技術と石器石材について」

日 時 平成 23 年 10 月 1 日（土）・2 日（日）

会 場 別府大学 18 号館（記念館）

詳細は次号で紹介する予定です。

会費納入のお願い

2011 年度会費の納入をお願いします。また、2010 年度以前の会費を納めていない方は、速やかに納入してください。会費納入は同封の郵便為替用紙でお願い致します。年会費 5000 円で、振込先は、日本旧石器学会郵便振替番号 00180－8－408055 です。

住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願いいたします。事務局までメール等でご連絡ください。

編集後記

沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の調査報告につきましては、ニューズレター委員会から依頼して原稿をいただきました。『考古学研究』57-3 号と重なる部分等の一部の内容の変更について執筆者にお願いしたところです。山崎さんをはじめとする執筆者の方々にはご配慮いただきました。記して感謝を申し上げます。（谷）

このたびの震災に被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。東日本ではいくつもの学会・研究会が中止や延期となり、関係者の皆様の御苦勞がうかがわれます。A P A 日本大会も秋に延期となりましたが、会員の皆様が元気で御参集くださることを願っています。（沖）

日本旧石器学会ニューズレター

第 17 号

2011 年 6 月 6 日発行

編集：日本旧石器学会ニューズレター委員会

谷 和隆・山原敏朗・沖 憲明

発行：日本旧石器学会

事務局：明治大学博物館 島田和高

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

アカデミーコモン地階 電話：03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp

HP <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpra/index.htm>